

近代日本発展の基礎を伝えよう③

明治近代化の土台支えた江戸期の藩校・塾・寺子屋

全国日本語学校連合会主席研究委員 佐伯浩明

江戸時代の教育について、最もよくまとまった記述の書籍は、文部省が出版した「学制百年史編集委員会」編の『学制百年史』（帝国地方行政学会、1972 年刊）である。同書は、「明治 5 年の学制頒布以来、百年間の教育の発達のを、制度を中心として概述したもので、記述編と資料編の二部からなっている」（同書「まえがき」より）。

今回は、この『学制百年史』の記述篇の第一編「近代教育制度の創始と拡充」の序章「幕末維新期の教育」の筆頭にある「一、幕末期の教育 近世の教育から近代の教育へ」を土台にして、江戸時代の藩校、郷校、塾、寺子屋の実態を紹介しよう。



1972 年に文部省から出版された『学制百年史』

そこで分かるのは、江戸時代の教育が、倫理・道徳、つまり「人のあるべき道」を繰り返し、繰り返し説いていることである。幕末の日本を訪れた外国人が、日本人の明るさと道徳律の高さに感銘を受けたのも、よく分かるのである。

◆道徳律の高い武士を作った江戸期の藩校

江戸時代の武士は、山鹿素行が述べたように、士・農・工・商の一番上の階級に位する責任ある地位にありながら、生産に与る立場にはなかったが故に、上に立つ者の責務として、ふさわしい文武の教養と訓練を求められた。そのため設けられた教育機関が「藩校」であった。

まず藩主は、自らの教養を高めて藩の統治にあたるために、儒学者や兵学者を招いて講義させ、重臣たちにもこれを聴講させた。また、藩士にも学問を奨励し、武芸とともに文の教養を積むことを求めたという。

江戸時代の学問は、前述したように幕府の方針に基づいて儒学を中心とし、なかでも朱子学を正統の学問として尊んだ。中世の武家は、寺院で僧侶を師と

して学問修行に努めたが、近世の武家は、城下に学校を設けて儒学者・漢学者を師として学問を学んだ。この学校が藩校である。藩学ともいった。

藩校は、江戸時代の初期にはごく一部の藩に設けられたが、中期以後は急速に普及して小藩にも設けられ、幕末には二百数十校に達していた。

昌平坂学問所は江戸時代において藩校の模範ともいふべき地位を占め、これにならって藩校を設立し、整備した藩も多い。昌平坂学問所の出身者を儒臣として招き、あるいは藩士の中から俊秀を選んでここに留学させた藩も多かった。昌平坂学問所は最高学府で、かつ藩校の教員養成の機能も果たしていたといえる。

藩校には漢学中心の家塾や私塾に起源をもち、後に藩の直轄校、すなわち藩校として拡充・整備されたものが多い。漢学はとくに儒学が中心であったが、当時の漢学は、著名な経書・史書・詩文集などを教科書として使用した。

『孝経』、四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）、ついで五経（『易経』『書経』『詩経』『春秋』『礼記』）などが一般に重んぜられた。また入門書としては『千字文』や『三字経』なども用いられ、よく音読されもした。朱子学派では『小学』や『近思録』（宋学の入門書）も四書や五経と並んで尊ばれた。

ちなみに『千字文』とは、中国の梁の時代に、武帝が皇子の為に官僚で文章家の周興嗣しゅうこうしに命じて作らせた文字習得用教材。「書聖」と呼ばれた書家、王羲之おうぎしの筆跡を模写して作られ、書道の手本として広く利用された。千字の異なる漢字を使い、250の4字の短句からなる韻文で構成されている。文字が一字も重なることなく、天文・地理・政治・経済・社会・歴史・倫理などの森羅万象を記述。「周興嗣はこの千字文を一夜で考えたが、完成させて武帝に献上した時には白髪になっていた」という伝説が残されている。

また、『三字経』は中国の宋代に作られた初心者向けの学習書。子供たちに漢字三文字で生き方の知恵や教を説いている。例えば「人が決して忘れてはならない五つの徳」では、「曰仁義／礼智信／此五常／不容紊」とある。読みは「曰わく仁義 礼智信 此の五常は 容（まさ）に紊（みだ）るべからず」。リズムよく音読しながら、人として大事なことを自然に身に付けられるよう工夫されている。

◆有力藩の藩校は文武両道の総合大学化

こうして教育内容も次第に広がり、漢学のほか国学（皇朝学、和学、古学ともいう）をおき、幕末には、洋学や西洋医学を加えるものも多くなった。教科は、幕末になるに従い増加し、さらに武芸も加え、藩校内に文武の施設を併せ持つ藩校が多くなり、幕末の藩校は、総合的な教育機関の性質をもつに至った。

創立が古く、また規模も大きく著名な藩校には、名古屋・尾張藩の明倫堂、会津藩の日新館などがある。明倫堂の名をつけた藩校は、他にも小諸藩、上田藩、高鍋藩、金沢藩、新庄藩、大洲藩と多い。尾張藩は、藩祖・徳川義直の時代にできたが、日新館は、藩祖・保科正之の時代に起源をもつ。儒臣の家塾が後に藩校として整備・拡充されたもので、水練用の池も備えていたといわれている。

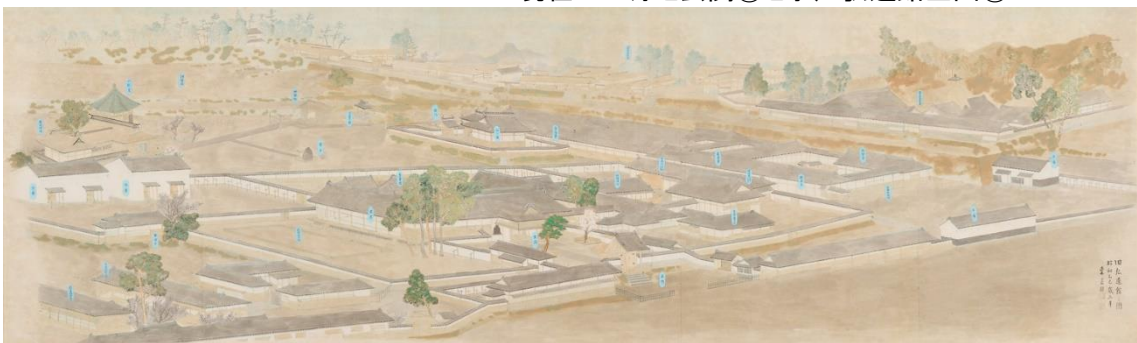


1987年(昭和62)に、残された図面を基に完全復元された会津藩の日新館

また、岡山藩主・池田光政によって設立された花島教揚も創立は古い。その他、著名な藩校を創立年代順に挙げれば、米沢藩の興譲館、佐賀藩の弘道館、和歌山・紀州藩の学習館、萩藩の明倫館、仙台・伊達藩の養賢堂、熊本・細川藩の時習館、鹿児島・薩摩藩の造士館、金沢・加賀藩の明倫堂などがあり、時代はやや下るが、水戸藩の弘道館は、「江戸時代最大の藩校」ともいわれている。



現在の正庁と玄関㊤と水戸弘道館全図㊦



弘道館は、第9代藩主徳川斉昭が推進した藩政改革の一つ。建学の精神は、1838年(天保9)に斉昭の名で公表された藤田東湖の起草による「弘道館記」にある「神儒一致」「忠孝一致」「文武一致」「学問事業一致」「治教一致」の5項目である。3年後に仮開館式が挙行され、15年あまり後の1857年(安政4)5月に本開館式の日を迎えた。敷地面積は約10.5haで全国一の規模。正庁(学校御殿)・至善堂の他に文館・武館・医学館・天文台・鹿島神社・八卦堂・孔子廟などが建つ。馬場・調練場・矢場・砲術場も整備された総合的教育施設だった。

弘道館では藩士と子弟が学び、15歳から40歳まで就学義務があり、学問では儒学・礼儀・歴史・天文・数学・地図・和歌・音楽など、武芸では剣術・槍術・柔術・兵学・鉄砲・馬術・水泳など多彩な科目が教えられ、他に医学館も備え、医学教授の他、種痘や製薬なども実施したという江戸期の「総合大学」である。

◆全国で2万近い寺子屋、幕末の識字率は世界一

他方、庶民は、日常生活に必要な教養を求め、読み・書き・算盤を主とする少年期の教育機関として「寺子屋」や、やがて「塾」が成立した。寺子屋は江戸時代後期、特に幕末にかけて著しい発達を見て、近代の小学校の母体となった。

江戸時代の庶民は、封建社会の構造に基づいて庶民としての道徳が求められ、日常生活に必要な教養を積むべきものと考えられた。

幕府は1720年（享保5）に徳川吉宗が、南町奉行・大岡忠相を通じて指導要領を高札にして道徳教育の実施を命じた。その2年後には『六諭衍義大意』という中国の書物を要約した本を刊行し、江戸の寺子屋の師匠（りくゆえんぎ）に配布した。

この『六諭衍義』は、明の太祖・洪武帝が發布した6カ条からなるお諭しで、日本には琉球を経て伝わった。すなわち「父母に孝順（孝行）なれ、長上（目上）を尊敬せよ、郷里に和睦（親睦）せよ、子孫を教訓（教育）せよ、おのおの生理（職業）に安んぜよ、非為（非行）をなすことなかれ」をいう。

『六諭衍義大意』はお諭しを分かりやすく解説したもので、徳川吉宗が、荻生徂徠に和訓を、室鳩巢に和訳を作らせ配布した。明治の初年に至るまで、寺子屋の手習（てならい）に利用された。内容は「博打など犯罪をしないように」、「親孝行をなささい」、「年長者を敬いなさい」など現代でも通用する常識的な十カ条が書かれている。寺子屋では、道徳教育の教材として用いた。

江戸時代の庶民の教育は、家庭生活や社会生活を通して行われた。当時は、徒弟奉公や女中奉公などの奉公生活や、若者組などの集団生活を通しての教育も重要な意味をもった。また社会教育施設としての教諭所も発達し、庶民や町人、農民に分かり易く道徳を説いた石田梅岩の「心学講舎」や二宮尊徳の「報徳教」なども全国に広がり、庶民教育に大きな役割を果たした。

しかし、江戸時代中期以後は寺子屋が発達し、庶民の子供の教育機関として次第に一般化して、重要な位置を占めるようになった。

当時の外国では、読み書きの出来る庶民は少なく、世界でも、日本は文字を読める人の割合が最も多い国であった。研究者の調べでは、識字率は、嘉永年間（1848年～1854年）の江戸府内では70%～80%。武家階級は、ほぼ100%と推定されている。また、幕末の日本全体の識字率は、男性が40%～51%、女性は15%～21%だったが、当時の水準で「世界一」と言われていた。

寺子屋の起源は、中世末期にまで遡（さかのぼ）り、中世における寺院教育を母体に発生したものと見られる。「寺子屋」の「寺子」という呼称もここから発生している。寺子屋は江戸時代中期以後しだいに発達し、幕末には江戸や大阪の町々はもとより、地方の小都市、さらに農山漁村にまで多数設けられ、全国に広く普及した。その数は1721年（享保6）には江戸府内の寺子屋の師匠は約800人、幕末には全国で1万5千から2万ほどの寺子屋があったと推計されており、「寺子屋のない町や村はない」とまで言われた。

寺子屋の教師は「師匠」「手習師匠」と呼ばれ、生徒を「寺子」といった。師匠は、寺子屋の経営者でもあり、平民が最も多かった。次いで武士・僧侶・神

官・医者などが経営する寺子屋もあった。寺子屋には5歳、ふつうは7歳から8歳で入門し、初午(2月最初の牛の日)を吉日として入学するのが通例だった。



自由気ままな感じの寺子屋の授業を描いた版画

入門料と授業料は一律ではなく、寺子(生徒)の親の社会的地位と経済状況に応じて支払える額を支払ったようだ。入門料は親が近所から話を聞き、師匠にふさわしい額を包んだ。大体2百文から3百文、経済的な余裕があれば2朱(1両の8分の1)、親が大店ならば、1分(1両の4分の1)を包んだそうだ。また、盆暮れや五節句には百文から千文程度を、親が経済的地位に応じて礼金として持参したようだ。

子供は、職人の親方に弟子入りするか、商家へ奉公に行くなど働き始める時期になるまで通うため、男の子が、12歳か13歳、女の子は、13歳か14歳まで通った。就学期間は平均6年ぐらいだった、と言われている。寺子屋では、庶民の日常生活に必要な実用的・初歩的な教育を行っており、学習の大部分は「手習」で、それに読物が加わった。また、町人生活に必要な「算用」すなわち算盤は、自宅か「算盤塾」で学んだ。

「手習」は、まず言葉の「いろは」・数字から始め、十干・十二支・方角・町名・村名・名頭(ながしら)・国尽(くにづくし)などを学んだ。初めは師匠が書いて与えた「手本」(てほん)を見ながら書き覚えていった。

◆寺子屋の教科書は7千種。『往来物』が大流行

次には「往来物」という江戸期の教科書を習った。往来物おうらいものは、史書・詩文集、さらに仏教の教典、わが国古典の類いとは異なり、「問い」と「答え」の往復の手紙文を集めた形式で、源は平安時代末期にまで遡る。中世では武家の教科書としても作られ、近世には庶民の教科書として大いに発達した。

有名なのは『庭訓(ていきん)往来』である。日常生活に必要な多くの用語を示し、それが意味する社会事象を教えた。庶民の生活を背景として新しい往来物が多数作られた。内容は、①庶民の日常生活に必要な手習いを主にしたためたもの。②地理関係の往来物。『国尽』や『東海道往来』などが代表的である。③他に『商売往来』・『百姓往来』・『番匠往来』などのような産業関係の往来物も多数現れた。④「教訓的往来物」も多く、守るべき庶民道徳を内容とした。

この他、平安時代にできた『実語教』や、鎌倉時代にできた『童子教』も、江戸庶民の子供たちの教育によく使われた。寺子屋の教科書は約七千種類(女性用はこのうち、千種類)あり、寺子屋の備品で使い回しされていた。

「山高きが故にたつとからず、樹有るをもってたつとしとす。人肥たるが故にたつとからず、智有るをもってたつとしとす」の一文で始まる「実語教」は平安時代に、そして「弟子七尺を去って 師の影を踏むべからず」などで知られる「童子教」はいずれも深く人の心に沁みこんで、日本人の教養の基層をなした。

江戸時代には町人の経済生活と関連して、算盤の教育が重要な位置を占め、江戸時代の初期に作られた算盤の使い方などを示した代表的教科書に『塵劫記』^{じんこうき}がある。その後「何々塵劫記」と題した多数の算盤書が作られた。



『塵劫記』は岩波文庫に収められ、現代語訳で読める

『塵劫記』といえば珠算教科書を意味したが、もともと『塵劫記』は、明の民間数学者の程大位が表わした『算法統宗』にヒントを得て、1627年（寛永4）に吉田光由が執筆した。命数法や単位、掛け算の九九などの基礎的な知識のほか、面積、両替や利息計算などの実用的な計算、平方根・立方根の求め方などを記し、算術を身近な話題をもとに解説している。これ一冊で当時の日常生活に必要な算術全般をほぼ網羅できたという。これにより庶民の計算能力が培われ、筆算が近代に導入される際に基礎を作り、大きな意義を持った。

◆儀作法重視の女子教育

江戸時代は、親子関係・夫婦関係も主従関係と同様に見なされ、女子教育は、このような人間関係を基礎とし、男子の教育と全く区別して考えられていた。庶民も武家とほぼ同様で、江戸時代には、女子は男子のように学問による高い教養は必要がないものと考えられ、女子は女子としての心得を学び、独自の教養を積むべきものとされた。

女子教育は主に家庭内で行われ、家庭の外では、お屋敷奉公や女中奉公を通じて行儀作法などを学ぶことが重視され、学校教育のような組織的な教育の必要は認められなかった。しかし、上流の女子は、手習や読書を学び、さらに古典文学や諸芸能を学んだが、一般には家庭の中の女子として、また妻としての教養が重んぜられた。女子の教訓書も多数現れ『女大学』をはじめ、『女論語』・『女訓孝経』『女今川』『女実語教』など有名な教訓書に「女」の語を冠した。

しかし、幕末には寺子屋に学ぶ女兒も増加し、女子用の教養施設も設けられ、裁縫・茶の湯・活花（生花）あるいは礼儀作法などの女子的教養、すなわち女としての「たしなみ」が重視された。

◆民間有志で立ち上げた郷校を藩も支援

江戸時代で注目すべきものには郷校（郷学）がある。大別して二種ある。

一つは藩校の延長あるいは小規模の藩校ともいうべきもので、藩主が藩内の要地に設けたり、家老・重臣などが領地に藩校にならって設けたりした。この種の郷学は武家を対象とし、教育内容も藩校とほぼ同類である。

他の一つは、主として領内の庶民教育を目的とし、藩主や代官が設立を支援した。寺子屋とほぼ同類だが、幕府や藩主の保護・監督を受けていた。

また、郷校には武士のほかに庶民の入学をも認める両者の中間的なものもあった。郷校の中には、岡山藩主・池田光政によって設立された手習所を統合した閑谷学校（閑谷しずたに）などがあり、この郷校は、創立も古く規模も宏大で非常に有名である。郷校には民間有志の設立経営も多い。



日本最古の庶民のための郷校・岡山の閑谷学校

◆全国から学びにきた名門私塾の発達

江戸時代の教育機関として藩校・寺子屋などとともに注目すべきものは「私塾」である。私塾は一般に教師の私宅に教場を設け、学問や芸能を門弟に授ける教育施設であった。私塾は本来古代・中世の秘伝思想の流れを受けて、師弟の緊密な人間関係に基づき、特定の学派や流派の奥義を伝授することを目的として設けられた。しかし、近世になると奥義伝授よりも公開的性格が強くなった。

幕末の私塾は、漢学塾・習字塾・算学塾（算盤塾）・国学塾・洋学塾と多様になり、各種の私塾が発達した。幕府は漢学、特に儒学を教学の中心に据え学問を奨励したので、多数の儒学者・漢学者が現れた。漢学塾が江戸時代を通じて隆盛で、有名な儒学者の塾には全国から俊英が集まり、優れた人材を輩出した。

例えば「近江聖人」とうたわれた陽明学派の中江藤樹の「藤樹書院」（近江国高島郡、現在の滋賀県高島市）。古学派の伊藤仁斎の「古義堂」（京都・堀川塾）。また江戸時代後期は広瀬淡窓の「咸宜園」（大分）。「咸宜」とは、中国最古の詩集『詩経』にある「殷、命を受く咸宜（ことごとくよろし）、百禄是れ何（にな）う」から来ている。「すべてのことがよろしい」という意味で、淡窓は「門下生一人ひとりの意志や個性を尊重する教育理念を塾名に込めた」という。



朝倉文夫作の広瀬淡窓坐像と大分県日田市の咸宜園の居宅

この他、幕末には多くの志士を生んだ吉田松陰の「松下村塾」（長州萩、現在の山口県萩市）などがあり、それぞれの特色によって広く知られた存在となった。また、幕末には各地に漢学塾が設けられたが、漢学塾は、明治維新後は衰微したものの、儒学思想は、近代日本の教育の中に強い伝統をもって継承された。